

「まさかに」の用字

鈴木 丹士郎

一

前稿（『まさかに』考―馬琴の読本を中心として―）『専修人文論集』86号―二〇一〇・三。以下「前稿」とするときはこの論文をさす）で、主として『南総里見八犬伝』に見られる「まさかに」の意味と用法について考察した。今回は、あらたに『開巻驚奇俠客伝』における用例を加え、前稿の考察を確認し、さらに「まさかに」を中心に「まさか」をも含め、それらの用字（漢字表記）について検討することにした。

また、おおまかではあるが、明治期以降の用字についても触れることにする。

二

1 「前稿で『南総里見八犬伝』において「まさかに（正可）」という語が第六輯卷一（文政一〇年―一八二七）あた

りから現れるようになる。」と述べた。第六輯巻一・五二回の例はすでに前稿に引いたが（79ページ）、この例は、
 疲労^{つかれ}て実に熟睡^{うまゐ}したり、とまさかに思ひ定め^{さだ}めん。

とあり、漢字をともなわず仮名で「まさかに」とある。同様の仮名書きの例は第六輯巻五上・五九回に、

かくてこの天工奇絶の石橋を、辛^{から}くして渡り果れば、前^{まへ}面に自然^{せぜん}の石門^{せもん}あり。是^{これ}第一の正門^{せいもん}歟。まさかにして
 東に向へり。

とある。五九回の刊行年は文政一〇年である。「まさかに」と仮名書きされているものはこの二例であり、文政一〇年以降現れる例は漢字「正可」をともない、

嚮^{むか}に小可^{せうが}が、廁^{せう}より出^{いづ}る折、正可^{まさか}に見^みたる盗見^{ぬすびと}は、是^{これ}這奴^{こゝろ}にて候。（八輯巻六・八五回）
 のように「正可に」のかたちで用いられる。

『南総里見八犬伝』は文化二一年―一八一四に肇輯巻一―巻五が刊行されたが、それから文政六年―一八二三（五輯巻一―巻五）までは「まさかに」という語自体が現れず、文政一〇年刊行の六輯から現れるようになることは先に述べたとおりである。そして「まさかに」が漢字「正可」をともなって用いられるようになるのは天保三年―一八三二刊行の八輯以降である。「正可に」の出現状況を示すと次のようである。実際の用例は前稿に譲り、省略したがった。

八輯巻一・七五回、巻二・七六回（二例）、巻三・七八回（二例） 七九回、巻四上套・八〇回 ―天保三年―一八三二

八輯巻五・八三回、巻六・八五回 ―天保四年―一八三三

九輯巻五・一〇一回 一〇二回 ―天保六年―一八三五

九輯卷九・一〇九回、卷一二・一二四回（三例）、卷一二下・一一五回（二例） 一 天保七年一八三六

九輯卷一五・一一八回 一一九回、卷一六・一二二回（二例） 一 天保八年一八三七

九輯卷一九・一二七回、卷二〇・一二九回、卷二三・一三四回 一 天保九年一八三八

九輯卷二八・一四四回 一 天保一〇年一八三九

九輯卷二九・一四六回 一四七回、卷三一・一五〇回 一五一回、卷三五・一五九回 一 天保一一年一八四〇

○

九輯卷三八・一六五回、卷四一・一六八回、卷四二上・一七〇回 一 天保一二年一八四一

九輯卷五〇・一八〇回上、卷五二・一八〇勝回中、卷五三上・一八〇勝回下 一 天保一三年一八四二

合計 三六例

三

次に、今回の調査対象に加えた馬琴の読本『開卷驚奇俠客伝』¹について見ることにする。この作品の構成は、

第一集卷一〜卷五 天保三年一八三二刊

第二集卷一〜卷五 天保四年一八三三刊

第三集卷一〜卷五 天保五年一八三四刊

第四集卷一〜卷五 天保六年一八三五刊

であるが、そのほか第五集（嘉永二年一八四九刊）がある。しかし、これは馬琴でなく、萩園主人（萩原広道）の作であるので調査対象に入れなかった。

『開卷驚奇俠客伝』にも「まさかに」がみとめられ、二〇例を数える。そのうち三例がいずれも「正かに」のことで第一集にままとまって見られる。あとの一七例はいずれも漢字表記「正可」をともなっており、第二集に五例、第三集に六例、第四集に六例みとめられる。まず、前稿と同様に「正かに」「正可に」の用法についてどのような意味分野の語にかかるかを見ることにしたい。

(1) 〈見る 認む〉など、視覚に関する語にかかる場合。六例

百官前後に従ひまつり、伶人は楽を奏して、那里へ遷御做しまるらせしを、当時侍従忠房と、京師の夢想法師の夢に、正可に見つることありけり。(二集二・一四回)

和主正可に見て来ぬる、緝捕の大勢近着たらんに(三集四・二七回)

姪がはしき光景を、正可に認め候ひしかば、うちも措れず(四集五・四〇回)

嚮に正可に甲乙二名、悄入たるを認たりしに、敵手の在らずなりたるは、躲せしにもや候はん。(四集五・四〇回)

(2) 〈聞く 聞ゆ〉という聴覚に関する語にかかる場合。五例

小六が亡骸を索得たりといひ做して、遊行寺へ安葬たる、その緯の為体、巷談街説異同なく既に正かに聞えしかば、心安しと思ひつ、(一集五・一〇回)

声高やかに、逆賊義満正可に听け。(三集二・二三回)

午牌より遊佐へ邁給ふといふ、伴徇の声せしを、正可に听て候ひき。(四集三・三五回)

(3) 存在の認識や内容・情況の把握などを表す〈知る 認る〉という語にかかる場合。二例

不知案内のくらき夜行に、迷ひやすらんと陆みて、事に後れし悔しさよ、とばかりにして問ずもあらば、正か

に知るよしなかるべし。(一集二・三回)

和主わぬしは亦いかにして、俺われを正可まさかに認りたる、こも不審いぶかしきことにこそ(二集一・一回)

(4) 言葉で表したり、物事のよしあしの判断を求めるなどを表す(言ふ 密訴す)という語にかかる場合。四例

遂に所領すゐのりを没官もつぐんせられて、妻子むすこ并ならに従類じゆるいを追放おひなされし、緯恁ことしくぐ々と正可まさかにいふもの多かりき。(二集五・一九回)

楠殿くすのどのの余類よるいにて、姑摩姫こまひめとか喚よび做なしたる、二八可にやの美女びよなり、と正可まさかにいふもの候まひき。(三集三・二五回)

名高なだる騙賊もがの猾張こつぎょうにて、人を殺し、牢むやを越こえたる旧悪ふるあく多きもの也、と正可まさかに密訴みつせしたりしかば(四集五・四〇回)

(5) 確信に満ちた判断を表す(助動詞「なり」)にかかる場合。一例

彼は正可あれに京師まさかより、我方みやこさまに向むけ、緝捕とりての大將士卒たいしやうしゆにこそ、と思へば(三集四・二七回)

(6) その他 二例

然さしも十善じゆぜんの君として、天日嗣知あまつひつぎとしめ召よす、御位みくらの最いとも正可まさかに、三種みくさの神器しんぎを伝つへ給たまひて、六合曲くわくわうくまもなく、治おさませ

給たまひぬる(二集二・一四回)

師恩しおんを戴いだきて、正可まさかに怨敵おんてき義満よしみつを射たへたりけれども(三集二・二四回)

以上のように『開卷驚奇俠客伝』に見られる「正かに」「正可に」の意味・用法も前稿の結果と特に異なる点はみとめられない。

四

『南総里見八犬伝』における「正可に」の出現傾向は二で述べたように、また【表1】からも明らかかなように全体に散らばっている分散的分布でなく、ある輯・巻に集中・偏りを見せる偏在的分布を呈している。

「まさかに」の表記については、明治期以降の用字の多様さなどから見て、他の漢字を当てることも可能であったのではないかと想像されるが、「正可に」が用いられるようになったのは他の語の表記の影響によるのではないかと思われる。

影響を与えたと考えられる語というのは「にはかに」である。「にはかに」は「まさかに」と同様に副詞のはたらきをし、『南総里見八犬伝』だけでも約二六〇例ほどみとめられる、よく用いられる語でもある。そして、この「にはかに」の表記のうちの一つが引き金になっている可能性が考えられる。

『南総里見八犬伝』では「にはかに」の表記として、

猛可に 猛に 暴に 俄頃に

の四種類が見られる。そしてこれらの現れ方は同じ傾向を示すわけではないのである。

「俄頃に」は肇輯（文化二年―一八一四）から四輯（文政三年―一八二〇）の、いわば前半に集中し、「猛に」は偏在せず、全体に散らばっている。これらに対して「猛可に」は、

眼中にはかに猛可に疼痛を覚て（八輯巻一・七五回）

折から猛可に降る雨に、出せし東西を濡さじとて（八輯巻五・八三回）

のように、八輯巻一から最後の九輯巻五三までの間に集中して用いられていることがわかる（表1）参照。表中の語の数字は頻度を示す。表2〜4についても同様）。

ところで、「猛可に」の「猛」は、近世中国語で、にわかに、突然、の意で用いられる語である。こちらの唐話辞書の類を見ると、

猛フタナリチ（引画小説字彙^②）

表1

『南総里見八犬伝』 輯巻数・刊行年		マサカニ		マサカ			ニハカニ			
		正可 に	まさ かに	要 緊	緊 要	将 有	猛 可 に	猛 に	暴 に	俄 頃 に
1.1～5	文化11 (1814)							8	2	1
2.1～5	文化13 (1816)							3		4
3.1～5	文政2 (1819)			1					1	8
4.1～5	文政3 (1820)			1	1			4		9
5.1～5	文政6 (1823)							6		
6.1～5	文政10 (1827)		2					8		
7.1～4	文政11 (1828)							1		
7.5～7	天保元 (1830)							1		
8.1～4	天保3 (1832)	7					11			
8.5～8	天保4 (1833)	2					6	1		
9.1～6	天保6 (1835)	2		1			27	4	2	
9.7～12	天保7 (1836)	6					24	6	1	
9.13～18	天保8 (1837)	4				1	16			
9.19～23	天保9 (1838)	3					19	3		
9.24～28	天保10 (1839)	3		1			16	2		
9.29～35	天保11 (1840)	5					19	1	1	
9.36～45	天保12 (1841)	3					21	3	2	
9.46～53	天保13 (1842)	3					14		2	
合 計		36	2	4	1	1	173	51	11	22
		38		6			257			

猛^{モシ} タチマチ フト也 猛可地トモア
 リ (忠義水滸伝解)⁽³⁾
 のようにある。また「猛可」についてい
 えば、「可」は接尾語で、その前に位置す
 る語が副詞(連用修飾語)であることを示
 はたらきをする。『小説詞語匯釈』には、
 猛可 突然。
 とあり、『水滸伝』(七回)、『拍案驚奇』(一
 回)の例があげてある。『忠義水滸伝抄訳』⁽⁴⁾
 には『水滸伝』一七回に見られる、
 猛可醒悟、曳住了脚
 の「猛可醒悟」を「イト気ヲツセ」と説明してい
 る。
 『南総里見八犬伝』以外について見ると、
 『開卷驚奇俠客伝』では「正^{まさ}かに」が見られ
 る一集にも、また「正可に」が見られる二
 集、四集にも「猛に」(一九例)も用いら
 れているが、「猛可に」(四六例)がこれを

上まわって用いられている〔表2〕参照）。

『近世説美少年録』は「正かに」が一例だけであるが、「にはかに」は「猛に」（四二例）の方が「猛可に」（五例）を大きく上まわっている〔表3〕参照）。

『新局玉石童子訓』では「正可に」が全体で八例、「にはかに」は「猛可に」（三五例）が「猛に」（五例）より多く用いられ、『近世説美少年録』とは対照的である〔表4〕参照）。

いままで見てきた馬琴の読本、特に『南総里見八犬伝』においてきわだっているが、「正可に」の出現の状況は「猛可に」のそれと符合していることが〔表1〕からも明らかである。これは偶然の一致でなく、「にはかに」の「猛可に」の表記に惹かれて「正」に「可」を添えて生じたのが「正可に」であったのではないかと考えている。

五

また、馬琴の読本にあつては「まさかに」がほとんど「正可に」の漢字表記をとるのに対して、「まさか」の合は「正可に」と異なる漢字表記、というよりは漢語に対応している。これは「まさか」が「まさかに」と意味が異なることを明確に示そうとしたものであろう。そしてその対応の漢語も二つの場合がある。

(1) 「まさか」が振り仮名として「要緊」と対応している場合。

底意地わるき伯母御夫婦の、機嫌をとること八九年、要緊の時には追遣られて（八犬伝・三輯二七回）

要緊の時にはいかにして、一人也とも憑むに足るべき。（同、九輯一〇〇回）

そを大将になされしかども、北畠父子弟兄と、護良親王を除きては、是ぞといはん武功もあらず、要緊の折には狼狽して、手足縁齷になりしのみ。（開卷驚奇俠客伝・三集二二回）

表 2

『開卷驚奇俠客伝』 集巻数・刊行年		マサカニ		マサカ		ニハカニ			
		正 可 に	正 に	要 緊	緊 要	猛 可 に	猛 に	暴 に	卒 に
1. 1～5	天保3 (1832)		3			10	9		1
2. 1～5	天保4 (1833)	5		1		7	1		
3. 1～5	天保5 (1834)	6		1		13	3	1	
4. 1～5	天保6 (1835)	6			1	16	6		
合計		17	3	2	1	46	19	1	1
		20		3		67			

表 3

『近世説美少年録』 輯巻数・刊行年		マサカニ	ニハカニ		
		正 か に	猛 可 に	猛 に	暴 に
1. 1～5	文政12 (1829)			14	
2. 1～5	天保元 (1830)			16	
3. 1～5	天保3 (1832)	1	5	12	1
合計		1	5	42	1
			48		

表 4

『新局玉石童子訓』 版巻数・刊行年		マサカニ	マサカ	ニハカニ			
		正 可 に	正 可	猛 可 に	猛 に	暴 に	俄 頃 に
1. 1～3 _上	弘化2 (1845)	1		16		1	
2. 3 _下 ～5 _下							
3. 11～15	弘化3 (1846)	2	2	9			1
4. 16～20							
5. 21～25	弘化4 (1847)	2		3			
6. 26～30	嘉永元 (1848)	3		7	5		
合計		8	2	35	5	1	1
				42			

また、『青砥藤綱摸稜案』（文化九年一八二二刊）にも、

菰平霽平といふ野伏を雇ひつゝ、要緊の時の方人にしたりしかば（後集・四）
とある例を見出している。

(2) 「まさか」が振り仮名として「緊要」と対応している場合。

緊要の時には山林に、手も足も出ぬ葉罐の湯煮章魚、真赤になりても恥知らず（八犬伝・四輯三五回）

緊要の折の盤纏にも、亦身を脱るゝ楷梯にも、せばやおもへば（開卷驚奇俠客伝・四集三一回）

(1) の「要緊」はあげた例も含め七例とも「〱の時・折」であり、(2) の「緊要」も同様である〔表1〕〔表2〕参照。さし迫っていて重要なさま、予期しない非常な事態に直面すること、の意の場合の「まさかの時・折」には「要緊」ないしは「緊要」の漢語を用いることにより、「まさか」の意味の特定を図つたものである。

これらのほかに『南総里見八犬伝』九輯一八回には、

將有の折の準備になん、那這となく撈衰めて、十両金を懐へ、斂めて来ぬる夜行に侍れば

のような「將有」がみとめられる。「將」は副詞で、まさに…す、の意であり、動詞の前に位置するが、漢文の句法としては「將有」であつて〔まさに（事）有らんとする〕折〕のような再読文字として訓読するものである。意味としては「要緊」「緊要」と同じであるので「まさか」の意味を「將有」のかたちで示そうとしたことが考えられる。

前稿で述べた（94ページ）『新局玉石童子訓』の用例、

喃我伏、心地正可に做り給ひし歟（三版・四三回）

やや長橋象船主、心地正可になりたる歟（四版・四七回）

に見られる「正可にな（做）り」は、「心地」が、

正可（名詞）―に（助詞）―なる（動詞）

ということであつて、失神や気絶から通常の意識・感覚に戻ることである。前者の例でいえば、お氣が付かれましたか、というほどの意である。副詞としての「正可」（確か、しっかり）と意味の上では続いていることが「正可」で表記したものと考えられる。

六

前稿では「まさか」「まさかに」について近現代の作物、特に文学作品からの用例も示した。しかし、意味や用法の考察を中心とし、気になりながらも「まさか」「まさかに」の表記については触れなかつたので、この章ではこれらの語の用字（漢字表記）について若干述べることにしたい。「まさかに」は「まさか」とともに同一漢字の中で扱い、また仮名表記だけの場合は除くこととした。ただ、次に示すような表記形態は当該語の表記全体の一環として考えるべきものであるが、今回は漢字で表記される場合に限ることにした。

されば民間に流布せる風説にしてマサカにと思ひて始に信を置かざりしこと往々却て其実にてありけるは、枚挙するに遑あらざりき。（福地桜痴、懷往事談・一五）◎印は依拠した本文にある通り）

さて、近年「日本語としての漢字」を知るための辞典として編纂されたものに『新潮日本語漢字辞典』（編者新潮社、二〇〇七年九月発行）がある。この辞典は「従来の漢文を読むための漢和辞典には記載されていなかった通常の日本語の様々な異表記、異体字、熟字訓などを積極的に収録した」（凡例）もので、「日本の近代、現代文学

から漢字使用の用例をとっている（刊行にあたって）点等々、いろいろ特色の見られるものである。

さらにこの辞典には熟語索引があり、「まさか」には四種類の漢字表記が次のように示してある。そしてそれぞれに原則として「…とも書く。」と別表記があげてある。

有繫 正可 真逆 豈夫

単字「豈」にも「まさか」の読みを示し、「打消しを伴って」否定の推測を強調する語。」と説明している（なお「推測」は「有繫・正可・真逆」では「推量」とある）。

次に、具体的に「まさか」の漢字表記の用例をあげることにする。なお用例が他に見出せない場合は前稿にあげたものも入れてある。

政

小説伝奇の類ハ世道人心に害ありと申せど、政（マサカ）かに善を懲し悪を勧むる趣意にも非らず（福地桜痴「日本文学の不振を嘆ず」『東京日日新聞』明治八年一八七五・四月二六日）

有繫

「さうぢやねえよ、有繫（マサカ）おめえ、他人（ヒト）のこと俺（おれ）だつて」分疏（いひわけ）した。（土・一四）

「おつうも大（おほ）かくなつたな、途中（ちゆうちゆう）でなんぞ行逢（いもや）つちや分（わか）んねえな、そんだが汝（わ）りや有繫（マサカ）俺（おれ）れこた忘（わす）れなかつたつけな」（同・一六）

「こんで同胞（どうぼう）のえ、嘶聞（さしき）な悪（わる）かねえもんだよ、有繫（マサカ）自分（おれ）ばかしよくつて他（ほか）の同胞（どうぼう）にや管（かま）あねえつちいもんもねえかんな」（同・一九）

お品（しな）は俯伏（うつぶ）したなりで煙臭（けぶりくさ）くなつた鯛（いわし）を喰（く）べた。／「ど（ど）うした塩辛（しよつぱ）かあ有（あ）んめえ」／「有繫（マサカ）佳味（かうめ）えな」（同・

(一)

それから何でも塵持つて鬼怒川さ行く積に成つたんでがすね、鬼怒川までは有繫余つ程ありあんさね(同・一〇)

正可

「シテ其船の船尾の方に。青き小旗を見ざりしか。」／「命ふ如く青旗をば。正可に看たりと覚え侍る。」(坪内

道遙訳、慨世士伝・初篇一套)

さいふ和君は正可に是。古論那殿の御内ならめ。(同、二套)

菟庭児も幼き時より。父は王者の子孫なり。と正可に聞て常に忘れず(同、四套)

和殿の偉業成功せば。殿下の嘉納御感あるを。正可に保證なすべきなり。(同、四套)

正可に此絵は我国に。自由空しといふ事と。税の重しといふ事をば。暗に知らする謎なるべし。(同、六套)

我輩は荒唐なる。信じがたかる神明の。応護を仰げる者にあらず。正可に尊き真神の。綾に賢き擁護を受け。将又賢き神慮を奉じて。はじめて之をなす者なり。(同、七套)

彼の幽玄なる仏道をも窺ひ見るべき便機となる一種深妙不可思議なる脚色の、別存在することを正可に穿鑿なすを得べし。(小説神髓、上・小説の変遷)

「笹の雪ちやアないかね」正可(浮雲・一編六回)

「ナニ正可嬉敷いとも云へないもんだからそれで彼様な貌をしてゐるのサ(同・二編一〇回)

彼様に昨夜のやうに遠慮の無い事をお言ひでないよ、ソリやお前の事だから正可そんな……不均なんぞはおおぢや有るまいけれども(同・二編一二回)

しんみりとの情話もせず、情らしい言葉一つ、当面には交さゞれど、定公万事を飲込みたれば、正可に間違のあらう訳なし。(広津柳浪、変目伝・六)

歴とした奥様のある旦那様を横奪する様な并んな筋道の違つた事は正可に遊ばすまいと存じますワ。(内田魯庵、くれの廿八日・二)

正可に功名心の為めと初手から意識なすつたわけやアなくて、能くいふ魔がさしたンでせう。(同・五)

女一人くらの、何処へ如何転がつたつて、正可日干になるやうなことは有やしませんからね。(徳田秋声、新世帯・三二)

真逆

真逆湯屋でも有りますまいね。(河竹黙阿弥、島衛月白浪・三幕)

流石に酸いも甘いも知り抜たる座主が事を分けたる頼なれば、乙女も真逆に木で鼻を括つた様なる挨拶も出来ず(福地桜痴、もしや草紙・四九回)

何しても婦の心が金石よりも堅いと来ちやア、真逆に強姦も出来めへだらうシ(緑簑談、前編一三回)

焦たる飯、枯たる沢庵を塩梅して彼等の真逆に向つて供給する事を努めたりしが(松原岩五郎、最暗黒の東京・九貧民倶楽部)

生命ある人間も茲に至つて亦一種の商品となる、然れども真逆に是を質としては、置く人もなかるべし。(同

・一二融通)

可愛想に彼お神さんが、彼様可愛らしい顔をしてえて、真逆に其様……。情夫があるの何のツて、世間ぢやア云つてるんだが(広津柳浪、黒蜷蜓・四)

おほ風呂敷ばツかし広げて居て、真逆の時になると、何時でも逃出して（同、今戸心中・七）
 大風呂敷ばツかし広げて居て、真逆の時になると、何時でも逃出して（同、今戸心中・七）
 兄さんに見付かつたつて、真逆に四片にされる事もなけりや、姦通にも落ちまいぢやアないかね。（同、河内屋・一二）

針は真逆の用意に、中々瞳の中には出て来ない。（虞美人草・六）

だつて、真逆運動会の計測掛になつて得意になる様な方でもないでせう。（三四郎・六）

「…（略）…今ぢや貴方より御爺さんくしてゐますよ」と云ふ。「真逆」と叔父が又答へる。（門・四）

津田は相手の観察が真逆是程皮肉な点迄切り込んで来てゐやうとは思はなかつた。（明暗・一三六）

相当に身分のある方々は、真逆に町の銭湯へも行かれまい。（岡本綺堂、新浮世風呂）

さういふ時、彼は子供のやうにお栄の懷に抱かれたいやうな氣になるのだが、真逆にそれは出来なかつた。（暗

夜行路、後篇四・八）

真処

真処ニ孔孟程ノ人が左様ナ蔽ハアリソモナイ事デゴザルガ（西 周、百一新論・上）

真箇

かう家爺さん、そんなに云ても、真箇口でいふやうは書けぬものだ（松田敏足、文明田舎問答・初篇 学校）

要緊

彼奴等酒にうかされて ようなき讒語を吐けども、要緊の折の用にたつべき奴原ならず（坪内逍遙記、春風情

話・壹篇壹套）

豈

大方権一郎の事は内々聴く積りで来たのだらうが、豈かに私の前でハ顔にも問難ねて、夫れで躊躇して居たのだらう（緑囊談・続五回）

それが濃でないと為れば、愛して居らんと考へるより外は無い。豈に彼人が愛して居らんとは考へられん（金色夜叉・前編六章）

高等学校時代の事を思ふと、それは十人十色で色々だったけれど、それでも豈かに今のやうに恥を知らない者は一人も無かつた。（小栗風葉、青春・秋之卷九）

肉慾上の些々たる快樂や満足が、豈に恋の希望なり目的なりでは有るまい（同、秋之卷一二）

豈か貴方を一時の弄物に為やうなんて、那樣憎むべき了簡では決して無かつたんですから（同、秋之卷一三）

豈夫

久振ぢや、豈夫手ぶらで帰られもしねえ。（徳田秋声、新世帯・一二）

豈夫貴女一人くらゐ日干にするやうな事はしやしない。（同、一九）

才は働くし、弁口もあるし、附いてゐれば、豈夫踏つて死ぬやうなこともあるまいけれど（同、二二）

近現代文学に見られる「まさか」について、その実態や傾向を云々するには提示できる整理した資料があまりに乏しいこともあり、結論めいたことを断ずるなどは到底不可能である。それでもあえて印象をも含め、一、二のことについて述べてみたい。

「正可」の、坪内逍遙訳『慨世士伝』（明治一八年―一八八五）に見られる「正可」は馬琴が読本で多用している用法につながる（注）が注意を引く『小説神髓』の例も同様。これは明らかに馬琴の影響と考えられる。同じく

逍遙記『春風情話』（明治一三年）の「要緊（の折）」も同様であろう。

また、長塚節の『土』に見られる「有繫」は、「さすが」の用字としてなじんだ者からすると多少の違和感を覚えるかもしれない。長塚節の他作品、さらに他作家の作品にも及ぶ必要を感じている。

小型・中型の国語辞典の中には「真逆」とも書く」と注記するものがあるが、「真逆」以外の用字を排除する理由は何なのであろうか。

用字（漢字表記）の問題も語ごとのリストを整える必要がある。同一人でも自筆原稿や初めの掲載媒体（雑誌、新聞）の段階から、単行本、叢書や全集に収められた場合、さらに文庫本化の段階など変更がおこなわれることがあるので異同の扱いにも慎重さが求められる。

七

「まさか」が副詞の用法に用いられるようになるのは、用例が多く、草双紙、洒落本、人情本などに見出されることから江戸時代も中後期になってからと思われる。これは前稿でも述べたことである。また、「まさか」「まさかに」の表記を見ると、これらの作品には漢字をとまうことがひじょうに少ないようである。

前稿の用例不足を補う意味もあり、黄表紙や合巻などの草双紙の例を山東京伝の作品に見ることにする。依拠した山東京伝全集の本文の表記体裁は、振り仮名の付いている漢字は原文にないもので校訂者によって補われたものである。

まさか土橋・中町までは手が届かず、やうく工夫して、蒟蒻島を仕舞に遣る。（江戸春一夜千両・上、天明六年一七七八六刊）

まさか縁の下からも出られねへから、画工もせうことなしに、かふ画いたものよ（薩梅枝伝賦・上、天明七年刊）

この女郎こそまさかの時は助太刀を頼みても、後へは引かぬ女郎なるべしと思ひ（復讐後祭祀・下、天明八年刊）

明暮れ剣術軍学にのみ心をゆだね、まさかの時は君の御馬前でいさぎよく打死にせんものをと（富士之人穴見物・上、天明八年刊）

まさかの時は、あの刀を売つてなりと、姉に事は欠かさぬ（梅由兵衛紫頭巾・前編中、文化八年―一八一一年刊）

まさかの時は金になる千鳥丸といふ名作を所持すれば、金のことには気遣ひなし（娘景清檻襖振袖・後編上、文化八年刊）

このように「まさか」はいずれも仮名書きで、校訂者はこれには漢字を当てていない。

草双紙にくらべて人情本などになると表記は文章全体にわたって漢字がいちじるしく多くなる。しかし、『春色

梅児誉美』『春色辰巳園』に見られる「まさか」は、

ほんにナア、しかしまさかにそうもなるめへ（梅児誉美・後編五）

まさか、そうとは思つても、此頃さつぱり藤さんの足は遠し、便りはなし（同・後編六）

まさかの時の用心に受取である二枚の證文（同・後編六）

元はともかくも、今じやアたがひに得心づくで、表向は親子、まさかの時は抱への奉公人（同・三編八）

そういはれると、己ばつかり惚込込てゐるやうだが、まさかそうでもねへヨ（辰巳園・後編四）

まさか其方そつちが陸釣をかづりの汐釣しほまぢといふひまもあるめへ（同・後編六）

まさか私わたくしどものちよいと休やすむにも、毛けなみを嫌きらふわけはないが（同・後編六）

まさか手てめへの善悪よしあしを知らずにくらす、幸こゝろさんだとおもふか（同・後編六）

のように仮名書きである。さらに年代が降つても、例えば山々亭有人の『春色恋廻染分解』（万延元年―一八六〇）慶応元年―一八六五刊）にみとめられる「まさか」は一〇例中九例が仮名表記である。⁽⁷⁾

『春色梅児誉美』『春色辰巳園』が刊行されたのは、天保三年―一八三二―天保四年、天保四年―六年である。この、天保三年―六年は『南総里見八犬伝』や『開卷驚奇俠客伝』において「正可に」がみとめられる時期である。

これまでの調査では、草双紙や人情本などに現れる「まさか」「まさかに」は仮名書きで、漢字表記されるものはほとんどない。⁽⁸⁾ なお、『春色恋廻染分解』の漢字表記の一例は次のようである。

悪策まぼかし先方さきかたへ往早々ゆきはや。左様さやういふ訳わけにも往いますまいし（五編）

今後とも広く用例の調査にあたりたいと考えているが、現段階でも馬琴の読本（特に『南総里見八犬伝』『開卷驚奇俠客伝』『新局玉石童子訓』）に見られる「まさかに」の意味・用法と漢字表記、それに「まさか」の漢字表記が特徴的であるということができよう。

（二〇一〇年一月三〇日）

注

（1）『新日本古典文学大系』87（岩波書店）に所収。

（2）『唐話辞書類集』十五集に所収。

(3) 『唐話辞書類集』三集に所収。

(4) 注(2)に同じ。

(5) 逍遙の馬琴に対する傾倒がどれほどのものであつたかをうかがうに恰好な彼自身の著述がある。それは『逍遙選集』第十卷所収の「曲亭馬琴」である。一部分を次に引用する。

私が初めて彼れに結縁したのは、たしか九歳の時であつたと思ふ。すなはち、まだ生れ故郷の美濃の太田にゐた時の事である。宅に、仮名垣魯文が、『八犬伝』の最も俗受のする部分だけを、中本仕立二十冊ばかりにして、芳幾の挿絵か何かで、形容や理窟や無駄を省いて、解り易く書縮めたのがあつた。それを読んだのが初めてで、馬琴が好きになり、十一歳以後、名古屋に定住して後は、貸本屋大惣に日参して、他の碌でもない戯作類を濫読したと同時に、そこに在つた限りの馬琴の作を漁つて読んだ。さうして、何故ともなく、何を目的ともなく、只むやみに馬琴に心酔してゐた。

さうして其心酔、其惑溺は、十八歳の上京間際までも続いてゐたのだから、私の晩手さ加減といふと聞えがよいが、低能さ加減が思ひやられる。

馬琴のあの機械的な、あほだらめいた七五調のマンナリズムやあの牽強付会な併しながら如何にも豊富な、講釈沢山の、物体ぶつた脚色やに感潮し切つてゐた私は、彼れ以外の戯作を支那料理の後の、昔の京都料理のやうに水つぽく、又は全くの田舎料理のやうに只わる甘く若しくは只塩からく思つた。名古屋にゐた間は、私が彼の西鶴や近松や浄瑠璃本や八文字屋物や黄表紙や菊蕪を、或ひはまるで見ず、或ひはほんの纒かに覗いて見た位で、閑却して了つてゐたのは、無論、私の鑑賞力が遲鈍であつたが為でもあつたが、一つは馬琴心酔病が、深く膏肓に入つてゐたからであつた。これほどの馬琴崇拜は逍遙の著述の文辞に反映しないわけはなかつたと考えるのが正しいであろう。一、二の事例をあげると、

民直なれば暴徒弱く。民悲徳なれば暴徒強かり。(概世士伝・初編三套)
 余熱を払ふ河風に。戦ぐ草葉の陰に鳴く。虫の音のみぞいと高かる。(同・一套)

奇異譚にまれフハイブルにまれ、あまりに単樸淺近にて興味うすかるものなどは(小説神髓、上・小説の変遷)
 などに見られる形容詞補助(カリ)活用の本活用化用法、それに、

夕榮ならで赤やかなる。(一面に怒を頭はして。(概世士伝・初編二套)
 いかに街の狹隘なる、空気の不潔なる(当世書生氣質・一一回)

のように形容詞語幹に接尾語「やか」の付いた新たなヤカ型形容詞なども馬琴の読本の影響であろう(拙著『近世文語の研究』東京堂出版)。馬琴熱が冷めてからでも染み込んだ馬琴臭はそう簡単には抜き去ることはできなかった。

(7) 浅川哲也氏(首都大学東京准教授)の御指示による。記して感謝の意を表する。

(8) 前稿(84ページ)にあげた『契情肝粒志』の用例「万^{まさか}一^{こそ}夫^はら程^{ほど}のことでもあるめえ(四篇中)は人情本刊行会叢書所収の本文に拠ったものである。この叢書の本文には問題のあることが従来から言われている。「万^{まさか}一^{こそ}」については、今回板本にあたることができなかつたので他日を期したい。

第六章にあげた作品の底本は次の通りである。

- 『新世帯』(『秋声全集』第七卷 臨川書店)
- 『暗夜行路』(『志賀直哉集』日本近代文学大系31 角川書店)
- 『今戸心中』(『定本広津柳浪作品集』上巻 冬夏書房)
- 『浮雲』(『坪内逍遙二葉亭四迷集』新日本古典文学大系 明治篇18 岩波書店)
- 『懐往事談』(『福地桜痴集』明治文学全集11 筑摩書房)
- 『慨世士伝』(『逍遙選集』別冊第二 第一書房(復刻))
- 『河内屋』(『定本広津柳浪作品集』上巻 冬夏書房)
- 『虞美人草』(『漱石全集』第四卷 一九九四年発行 岩波書店)
- 『くれの廿八日』(『内田魯庵集』明治文学全集24 筑摩書房)
- 『黒蜩蛭』(『定本広津柳浪作品集』上巻 冬夏書房)
- 『金色夜叉』(『尾崎紅葉集』日本近代文学大系5 角川書店)
- 『最暗黒の東京』(『明治名作集』新日本古典文学大系 明治篇30 岩波書店)
- 『三四郎』(『漱石全集』第五卷 一九九四年発行 岩波書店)
- 『島衛月白浪』(『河竹黙阿弥集』新日本古典文学大系 明治篇8 岩波書店)
- 『春風情話』(『坪内逍遙二葉亭四迷集』新日本古典文学大系 明治篇18 岩波書店)

- 『小説神髓』〔坪内逍遙集〕日本近代文学大系3 角川書店
- 『新浮世風呂』〔繪室江戶のことば〕河出書房新社
- 『青春』〔山田美妙・広津柳浪・川上眉山・小栗風葉集〕日本現代文学全集11 講談社
- 『土』〔長塚節全集〕第一卷 春陽堂書店
- 『日本文学の不振を嘆ず』〔福地桜痴集〕明治文学全集11 筑摩書房
- 『百一新論』〔明治啓蒙思想集〕明治文学全集3 筑摩書房
- 『文明田舎問答』〔明治文化全集〕二十四卷文明開化篇 日本評論社
- 『変目伝』〔定本広津柳浪作品集〕上巻 冬夏書房
- 『明暗』〔漱石全集〕第十一巻 一九九四年発行 岩波書店
- 『もしや草紙』〔福地桜痴集〕明治文学全集11 筑摩書房
- 『門』〔漱石全集〕第六巻 一九九四年発行 岩波書店
- 『緑簀談』〔明治政治小説集(一)〕明治文学全集5 筑摩書房